

複雑化する日本の安全保障

Vol.11
ソ連崩壊で
思い出すこと



いろいろと書いてきましたが、ソ連崩壊の前後の事情については、どうしても苦手です。簡単なことで、88年に第一子が生まれ子育てに追われていたためです。オムツを替えていたら突然ベルリンの壁が崩壊した、といった感じでしょうか。ですからヨーロッパ・ピクニック計画といったような、東欧圏で壁の崩壊に先立ってどのような事件が進んでいたのか

ビューを度々行っていることも、彼女への評価の高さを窺わせるものです。フランスにおけるロシアの第二大使、という評価を目にしたことがありますが、今回その出典を見つけたことはできませんでした。壁が崩壊した後、ベルリンを訪れる機会がありました。まだ東ドイツという国は残っていました。もはや東西の対立というものは消えて壁も崩れていて人の往来は自由でした。そうした中で、スパイ小説によく出てくる「チェックポイント・チャリリー」を通過して車両で東ベルリンに入ったのですが、すぐ脇の通路にドイツ人が並んで通っていたのが印象に残っています。壁が崩れて歩行者はどこでも行き来ができるのに、何故あそこに並んでいたのかは分かりません。いろいろお話ししましたが、記憶するということは日常生活から切り離すことはできないのです。30年近く前のことになりましたが、やはりソ

については、十分に分かっていません。世界史に残る事件をどのような形で経験したかというところは、とりわけ自分自身が生きて目の当たりにした事柄については、記憶の質を決めるものだと思います。

ロシアについては、エレヌ・カレル・ダンコースの著作に随分お世話になりました。革命から逃れた亡命ロシア人の娘である彼女は今年91歳、アカデミー・フランセーズの終身事務局長である彼女は、今でも元気に活動しているようです。たくさん著作がありますが、特に『未完のロシア』は、300ページほどの短いものであってもロシア通史として優れたものだと思います。ロシアは肥沃な土地であるため、農民が定住するということが乏しかったという事を初めて知りました。耕し、土地が瘦せれば他の場所に移っていったら、それがロシアの農民の姿だったのです。これでは封建領主は安定した収入を得ることができません。

連崩壊ということは衝撃でした。冷戦というものが未来永劫続くような感覚で防衛庁に就職し仕事を始めたのが1978年です。それから20年余りで東西の分裂というものが消えてしまいます。今となつては、あの時のユーフォリアは経験した者でなければ分からないような高揚感でした。子どもたちに説明しても「ふーん」でおしまいです。生活の記憶と仕事の記憶と。最後は私の笑い話です。1990年8月2日は、在京米国外務館の友人と昼食をともにしました。携帯電話のない時代、そろそろ夏休みに入る頃なのでゆっくり食事をして当時六本木にあった防衛庁に戻ったのは2時過ぎだったでしょうか。帰ってビックリ、イラク軍がクウェートに侵攻したのです。一体何が起きているのか、それを調べるところから始まり、日本はどのような姿勢で臨むのか、何ができるのかといった議論が続き、自衛隊のでき

ん。イヴァン4世（雷帝）の時代に農奴制が形成されていった背景には、こうした事情があったようです。

何故、「未完」なのかについては、筆者は簡単に説明していません。豊かな土地でありながらヨーロッパの辺境に位置するロシアは常に西欧諸国の動きに遅れをとっていました。言い換えれば、ロシアの歴史とは西欧に追いつこうとする努力とその失敗の跡ということができるのです。それでは共産党の支配した時代とはなんだったのか？

彼女によれば、西欧資本主義に追いつこうとして失敗したロマノフ朝の後に訪れた、農奴制への回帰、の時代だったということになるようです。確かに国内移動のパスポートが生まれたような体制は、私たちの常識からは想像することが難しいものでしたが、この説明で納得した覚えがあります。ロシアは彼女を大切に扱っていません。プーチン大統領への単独インタ

ることは何かの検討に移り、あつという間に数カ月が過ぎてしまいました。翌年の8月19日、件の友人と昼食をともしました。いや、去年はひどい目にあつたよね、という話をし役所に戻ると、今度はモスクワでゴルバチョフ大統領に反対するクーデターが起こっていたのです。数日間、役所に缶詰になる生活でした。以来彼とは、8月のランチはご法度です。



西 正典
Masanori Nishi
1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループ シニアアドバイザー。